

第56回神奈川建築コンクール 住宅部門審査総評 審査委員 室伏次郎

本年度の住宅部門応募は個人住宅 74 作、共同住宅 19 作、合計 93 作となった。各審査員が 20 作を限度に推奨投票する書類審査のうえ、18 作を現地審査対象とし、同審査の結果、個人住宅 8 作、共同住宅 3 作を選出した。表彰作品選考に際しては、まず各委員の全体感想を表明の上投票に入った。以下得票順に、最も高い評価を得たものは「Daylight House」である。市街地の住宅密集環境の中で、太陽光を最大限享受する事で自然を感じながらの生活空間を確保する工夫に満ちた作品である。小さな 1 室空間の全天を格子状トッライトとする大胆な着想が場所の制約からの発想を超えて空間のファンタジーを取得し季節を感じる生活の豊かさを生み出すものとなっている。一方あまりに内部指向の強い求心的空間が街との関係の遮断を生み、住人一人一人の個の意識とのバランスのとれた場となっているかという疑問が指摘された。「洲崎町の町家」は高齢者の共同生活の場を豊かに、というテーマを見事に実現している。建築主自らが共同生活のコーディネーターをつとめる企画が成功して、中庭を舞台に楽しく支えあう生活シーンが生まれる空間の力を感じさせる。其れを生み出す建築の細やかなデザインが設計の力を示している。多目的ホールと中庭の関係に全体の構成と乖離したものが感じられるところが残念であった。「空の洞窟」は強引な宅地造成が出現させた巨大コンクリート壁と階段という負のランドスケープを逆手に取って、彫刻家が原石から作品を掘り出す様にして壁の中に快適な生活空間を、頂上（宅地の 1 階）に空と海を我がものとする独自性の高い空間を取得している。低く押さえた計画で背後の住宅からの眺望を阻害しないものとしている点も評価された。「法面庭の家」は支持地盤条件の悪さに対して 3 棟に分割配置して荷重を低減し、挟まれた外部空間を視覚的に取り込み、実空間の大きさを超えた伸びやかな広がりのある場を取得している。狭小な住宅地の集まる中で道路からの奥行が感じられる場を作り出し、気持ちのよいスポットを提供している。「横濱紅葉坂レジデンス」は団地の自主建て替え事例として、ディベロッパー、設計者、施工者、自治会のチームワークが有効な力を発揮し住民および周辺環境に配慮の行き届いた、良好なスケール感覚の街区を生み出している。一般の同様事例と比較すれば建築的発想力の重要さを如実に示す好例と考えられる。自由通行路を含めた外構に、一般通行者が一見入りにくい門構えが在る事はセキュリティ上の制約の限界か。「逗子のアパートメント」は密集住宅地内で、周辺に比べて多少大型となる計画を近隣の環境スケールに見合う分節された屋根形というアイデアによって親しみのある建築とする事に成功している。「Wind-dyed House」は相模湾を見下ろすパノラマを究極的なまでに享受させる空間を作り出している。穏やかで環境に邪魔しないたたずまいを求める建て主の要望によく応えて、海と道路の間に立つ建築として心地よい場を提供するものとなっている。「Mina Garden 十日市場」は傾斜地の宅地造成は必ず雑壇型の擁壁を繰り返す事となりランドスケープ破壊そのものとなっている事を批判して、ここでは出来るだけ

自然法面を維持しながらの住宅団地を実現させている。決して大型ではない宅地単位でのこのような事例はまれであり、環境形成に大きな貢献が在る。一方この実施プロポーザルの要請は、住居の計画はサステナブルでエコロジカルな新しい時代のライフスタイルを生み出すような空間を求めている。それに対して、同技術論での回答は充分ながら新たな空間の提示には至っていないと思われた。「RSH:6」は新興の郊外住宅地のなかで外郭を閉じた箱として囲い、内部は中庭を囲む開放的なスパイラル状の様々なレベルの床が迫り上り、空に向かう屋上テラスに至る巧みな構成である。角地にあつて軒高を押さえたたはずまいは街路に広がりを与えているが、外郭のあり方は完全に閉じていて街との親和性が拒否されたもので、住宅地の外部空間をになう存在として疑問が感じられた。いかなる開口部のあり方をするかに都市との関係についての建築家の姿勢が示される。「西之谷の住宅」は設計者の自邸と事務所兼用の空間をコンパクトにまとめた計画である。木造建築としては大きなスパンを合理的に解決の上、模様替えの対応にフレキシブルな空間を提案し、その上で周囲の環境に閉ざす事なく個人の生活を確保されたバランスの良い計画を評価するものである。「N邸」は緑の残された環境にあつて木造の外郭の独特な意匠が、懐かしくもあり新鮮な感覚をも備えており、人々に安らぎと楽しさを与える景観を作り出していることから景観分野でのアピール賞とされた。年々の応募作の増加傾向のもとで、新しい住環境の提案に向けた想像力の挑戦は健在でありさらなるコンクールの発展を大いに期待させる。一方、集合住宅においては今も住戸の改革は低調だと言わざるを得ない。閉じた個の集合にとどまっております、集まって住む事で初めて得られる個の生活の豊かさを切り開く想像力を作品に見いだす事は極めて困難である。効率と経済性の追求が商品性として一義的に扱われるなかで、今や全国の住戸数は世帯数を大幅に超えている時代であり、集合住宅の真のクライアントは住民、市民である事の具現化を今後の大きな課題としなければならない。何よりも開かれた空間を備えた住居単位の新たな集合のあり方が構想されることが強く求められる。